道心

編集　日光山 禅昌寺「道心」編集室
発行　平成15年4月15日
〒732-0002 広島市東区戸坂山根3-2-7
☎ 082-229-0618 zenshoji@bronze.ocn.ne.jp

生かされている幸せ

住職　横山　正賢

修証義の冒頭に「生を明らめ死を明らむるは仏家一大事の因縁なり」と有りますように、人間は「生」と「死」が裏打ちされて生かされていることに目覚め、この生死の因縁を如何に結んでゆくかということが、仏教徒として一番大事と諭されています。

毎日の出来事や出会いの中で、いろんな事を学ばせて頂きます。ここに某老婦人との出会いをご紹介し「生死」について考えてみたいと思います。

この方は昭和六三年四月頃より婦人坐禅会に参加されるようになって、平成八年十二月八日この年の最後の坐禅会が終わり、「お正月の坐禅会でお会いしましょう」と言ってお別れしたのですが、十二月二四日未明に享年満九十歳で急逝されました。

老婦人は時にはお休みもありましたが、毎週の如く参禅される内に会員の方々とも打ち解けられたある時「自分は結婚して満州に渡り最初に女の子を授かった。その子が三日で生まれ、何故にこの様な醜い子を私に……と恨んだ。この子の将来を考えると悲観的なことばかりを考えて、いっそのことこの子と一緒に死んでしまいたいと、来る日も来る日も死ぬことばかりを考えていたある日、今日こそはと意を決したとき、『その子はお前でなければ育てられないからお前に授けたんだ』と囁くものを感じて、そうだったのかと己の浅はかさを恥じて『この子が幸せな人生を過ごすには親として自分は何をしてやれば良いのか』と自分に問いかけた、『健康で明るい子に育てよう』と一生懸命育てた。お陰様で今は五人の子供の中で一番幸せに暮らしている、優しい夫に恵まれ、明るく健康で人々に可愛がられている」と生かされた苦難の人生を悦びとして吐露しておられました。

こうしたお話を拝聴し、こんな事を思います。「生きる」ということは、「他を生かすという営みが、我も生かされる」ということのように思います。

人はどうしても自分中心の人生を考えるのが自然です。だから苦悩し卑屈になったり悲観したり孤独におちいったり、時に傲慢に振る舞うのではないでしょうか。

この老婦人が『その子はお前でなければ育てられないからお前に授けたんだ』という囁きを脳裏に聴いたとき客観的自己の生き方を心に問われたことで、苦難の多い人生では有ったでしょうが、悔いのない人生であられたことと思います。

「順風満帆の人生というのは本当に幸せなのでしょうか」と思うことがあります。逆境に立たされた時こそ、自分と向き合えるということを度々経験し、その都度新たなる自分と出会えたように思います。

私が日頃ご懇意にして頂いているご夫妻の奥様は、十年位前から腎臓を煩われて週三回透析をしておられます。この方は何時も清楚なお洒落と微笑みも豊かで、何処に病気をお持ちかと不思議に感じるほど前向きに生きておられるお方です。

ある時家内同伴で食事をしながらのこと、「私の若い頃は何時も行動的でした。透析を始めて、透析の数時間読書ができ健康なときには気がつかなかった時間の尊さを知りました」と話された。これを聴いてはっと元気印の己の慌ただしい日々を恥じたことでした。

人生は誰もが生老病死の苦しみに、恐怖や孤独や不安を背負って生きなければなりません。だからこそお互いに素直に、語りたい・理解されたい・手をさしのべてほしいという、気持ちを表して生きるとき、互いの心が相手に伝わり相互理解が生まれ、お互いを生かす「人間」という「生」が存在し、寄り添うという安心が得られ、皆共に往生してゆけるということではないでしょうか。

春の章 第4話

子育ては農業。

良き土としての親づくりが大切です。

愛知専門尼僧堂堂頭
青山　俊董

信州・長野の春は、遅く訪れます。私が住職を勤める無量寺のしだれ桜も、毎年やっと4月半ばを過ぎて満開になります。

そしてそれを待ちかねていたかのように、ご近所のお百姓さんたちがいっせいに田や畑に出ていきます。そうしてお百姓さんの姿を見ると、いつも思い出すお話があります。

――その昔、お釈迦さまがインドの小さな農村で托鉢しておられました。ちょうど今の信州のように、種蒔きの季節でした。村の人々を指揮しながら、忙しく立ち働いていた地主のバラモン（インド階級制度の最上位である僧侶階級）が、つかつかとお釈迦さまの前に歩み寄って言いました。

修行者よ、わたしは田を耕し、
種を蒔いて食を得ている。
あなたも、自ら耕し種を蒔いて、
食を得てはどうか」

お釈迦さまは微笑んで、答えられました。

バラモンよ、わたしも耕し、
種を蒔いて食を得ているのだよ

理解しかねて、けげんな顔でお釈迦さまを見つめているバラモンに語りつぎます。

信は、わが蒔く種である。
知慧は、わが耕す鋤である。
身と口と意でつくる悪行を制するは、
わが田における除草である。
精神は、わがひく牛である……

教育と宗教の使命は、人づくりです

荒れ地を耕し、木の根や石ころを取り除き、種を蒔き、肥料を施し、雑草を除くなどして、収穫をあげるのが、農業の営みです。人々の心を耕し、正しい信の種を蒔き、人格を育てあげ、間違いのない豊かな人間としての生き方へと導くのが正しい宗教のめざすところであり、教育の目的でもあるのです。

お釈迦さまは〝人々の心を耕し、正しい信の種を蒔く〟とおっしゃいましたが、その種蒔きや苗づくりのために欠かすことのできない、しかももっと大切な条件に土づくりがあります。

土づくりは種蒔きに先行し、しかも即席ではできません。きめ細かく心を運びながらの手入れを、長い年月かけてやって、初めてできるものなのです。

教育に生涯をかけられた東井義雄先生は、人づくりを農業にたとえ、

下農は草を作り、中農は作物を作り、
上農は土を作るという。

教育の畑の土づくりは親づくりだ。
作物であるところの子供を何とかしたいと思っても、土であるところの親が駄目なら駄目なんだ

とおっしゃられます。

よき土、よき苗床としての親の姿は、どうある

べきなのでしょうか。あるＰＴＡ会長さんのお話を紹介しましょう。

ただの体罰と、愛のムチの違い

「私の長男の俊男が小学3年生の頃のことです。雪の降る夕方、私が外出から帰ってきたら、仏壇の上に家内が６００円ほどの小銭を上げておいた中から、２００円ほど取って買い食いしたと聞かされました。私はカッとなって『俊男こい』といきなり息子の手を引っ張り、

いいか、お前のやったことは、どんなに悪いことか、お父さんが教えてやるからな。お前の体に今から水を5杯かぶせるからな

と思わず言って息子の服を脱がせました。

しかしな、お前が悪いことをしたのは、お前が悪いだけではない。そういう悪い奴を育てたお父さんの責任もあるのだから、お父さんも今から5杯水をかぶる

と言って、私も服を脱いでパンツ一枚になり、息子を抱いて外に出ました。

池の水を割って、まず私がバケツの水を5杯かぶりましたが、まるで心臓が止まるような冷たさです。目の前に、私のかぶる水しぶきを全身に浴びながら、それを避けようともせず、目から涙をたらたら流している息子を見た。この時ほど、

〈この息子は、おれの血を分けた大事な息子なんだぞ〉と実感を持って胸に迫ったことはありませんでした。

それから心を鬼にして水3杯かけたら、息子はすくんでしまいました。あとの2杯は半分にして、数だけは約束通り5杯かぶせると、私は息子を横抱きに抱えて風呂場に駆け込みました。そして乾いたタオルで、ゴシゴシ擦ってやりました。そしたら息子も脇にあった別のタオルで、ゴシゴシと私の腹を擦ってくれるのです。私は感極まって息子を抱き寄せ、男泣きに泣いてしまいました。それから俊男は、間違っても、他人のお金には、たとえそれが投げ出してあったとしても手を触れない子供になってくれました……

仏教に「同事（どうじ）」、または「同悲（どうひ）」という言葉があります。相手と一つになり、相手と事を同じくし、喜びや悲しみも同じくすると言うことです。このお父さんで言うならば、子供と一つになり、子供の悲しみをわがことと受け止める姿です。

そこには親の愛と、願いと、祈りがあり、そして実践があります。こういう土壌によい子供、よい苗が育つのはあらためて言うまでもありません。これがもし親が水をかぶらず、子供にだけかぶせたら、ただの折檻（せっかん）で終わり、幼き苗は闇の方へ伸びてしまうでしょう。

胎教はなぜ大切なのでしょうか

いま少年少女の非行や犯罪が、毎日、起こっています。そうした我が子を持って悩むお母さんたちが、無量寺にもたくさんみえます。ですけど、私には手にあまる内容が多くて、登校拒否の幼児のカウンセラーをしているＡ先生のところに、以前ご相談にあがったことがあります。Ａ先生は、幼稚園や学校に行けない子供たちのお友達となっておしゃべりしながら、子供に箱庭作りをさせるのだそうです。材料も子供が自分で選んで並べるのですが、初めは全く形になりません。心が静まり、開かれていくに従って箱庭らしくなってきます。その庭に五重の塔やお宮の鳥居のようなものが入るようになって、何となく宗教的な雰囲気が出てくると、その子が登校拒否などから抜け出し、立ち直れる状態にまで回復したという証しなのだそうです。

しかしそれは、その子の深層心理の中に種蒔きがすでにされていたからこそ、心が静まって目が出てくるのであって、種蒔きがなされていなかったら目は出ません。

そしてＡ先生は、こう結んでくださったのでした。「胎内に命を宿した瞬間から子供は、母親の身と心のありようを栄養として成長を続けます。臨月が近づけば、外の声も胎内で聞いています。赤ちゃんを宿したお母さんの生活のありようが、胎教という形で昔からやかましく言われるゆえんもここにありましょう。

生まれ落ちたらいっそうのこと、その日からなるべく家中で、朝に夕に、理屈はどうでもよい、とにかく仏壇の前で頭を下げる、手のひらを合わせる。そういう環境に中で育ってほしい。自分一人の力で生きているのではないのだ。なんだか分からないけど大きな大きな力によって生かされているのだということを、心の深いところに植えつけてあげてください。何かにつまずいた時、必ずそれが立ち直る力となりますから」

――子供の明日を左右する鍵のすべてが、親の手中にあるのです。

幼な子の、そのやわらかい田畑に、いかによい種をたくさん蒔きつけるか、悪い芽はどのように転じ、良い芽を育て続けるかを、育てる側の責任として自らに問いながら歩んでいきたいものです。

※（本文は、青山俊董尼老師著「悲しみはあした花咲く」光文社より抜粋したものです。）

早朝坐禅

東区在住　青笹　俊枝

朝五時の目覚ましで起き、ベッドから降りるとまた今日も無事に歩けて有難いなあと独り言が出る。二年前膝の骨折で半年入院して、退院の時、医師から「後遺症が出るかも知れない。それを防ぐにはひたすら歩く事だけだ」と言われていたので、坐禅にお参りさせて頂こうと、痛いのを我慢して早朝坐禅にお参りすることにした。

三十分かけてお参りする。万歩計で三千歩、外はまだ真っ暗だ。自然と般若心経が口をついて出る。十五巻ぐらいで山門に着く。

朝の空気はとてもおいしい。坐禅をしていても体一杯にその気を頂く。静かにする呼吸を数えてみたら四十分で八十五から九十回だった。終った後少し暇を頂いて、道管さんの尺八と本堂からのお経を聞かせて頂いて、身も心もすっきりして家路に着く。でも帰り道は少し忙しい気持ち。それは自動車のナンバーの数字二桁の足し算をする事。信号待ちの時は特に忙しい。次々来る車のナンバーを覚えるだけで大変。大きい数字だと暗算出来ない。

この前、相田みつを先生のお話を聞く機会を得て多くの素晴らしい言葉の中で、「一生勉強一生青春」が心に残った。私も今からでも暗算の勉強をしようと思い立った。これなら歩きながら出来るから時間もとらないので続けて行こうと思っている。

毎朝のことだから色々の事がある。ある朝ビルからゴミを出しに来た奥さんが、「あんた歩くのはいいけど明るい時にしなさいよ、余り奥の方へ行きなさんなよ危ないからね。」と言って下さった。きっとボケ老人の徘徊と見られたのだろうと思い、「ハイ有難うございます」と返事したとたんに般若心経が狂ってしまった。唱えても唱えても羯諦羯諦に届かない。ぐるぐると同じ所ばかり唱えてお寺に着いてしまった。ほんとにボケてしまったのか。

またある朝、途中から雷鳴とともにどしゃぶりの雨になってしまい、仕方なく近くの家の車庫に雨宿りさせて貰っていたら、ご主人が出てきて暗い所に私が立っていたので驚かれて、「すみません急に雨になったので雨宿りさせて貰っていました」と言うと、「では傘を貸して上げましょう」と男物の傘を「返さなくていいからね」と言って貸して下さった。帰りには雨は上がっていたのでお礼をいって返しておいた。とても有難かった。

また雨のしとしと降っていた朝、カーブを回ってお寺に入る所で街灯の灯に照らされて千円札の夏目漱石が見える。まさかと思ったが確かめたくて、べったり張り付いているのを破らないようにそっと剥がして裏返して見ると、ちゃんと二羽の鶴が舞っている。この裏山には狐がいるそうだから、狐に騙されているかも知れないと思いながら、裏に返し表に返ししながらお寺に着いた。もし本物でも警察に届けるほどでもないと思い、お賽銭にしようと本堂の賽銭箱の木の上に干して置いた。ひょっとして乾いたら木の葉っぱに戻っているかもしれないと思いながら・・・

こうして早朝坐禅は楽しみながらも、何時まで続くか知れないけれど、お参りさせて頂きたいと思っている。

生命を育む―Ⅲ

いのちの芽を育てる

山主

これは、教育者であり浄土真宗の僧侶であられた、東井義雄先生の著書の一冊であります。この著書の最初に。

少年少女たちが、今、いのちがけで叫んでいる。私は、子供たちの問題行動は、行動による叫びだと考えてきました。あなたは次の詩をどうお読みになりますか。ある問題の中学生が書いたものです。

学校へ行きたい

学校へ来るなといわれても
おれはゆく
たとえ授業はわからなくて
もおれは聞く
当番はやらないし
机はぶっこわす
ゴロツキで
ノケモノだけれど
おれは　朝起きると
登校するため　顔を洗い
教科書とノートを
カバンにおしこみ
五分でめしを食って
門まで突っ走る
なぜかわからないけれども
朝のおれの仕事は
そうに決まっている。

それなのに　先生は
遊びにくるようなやつは
家へ帰って寝てろ
なんていう
学校へなんかくるなと
おれをぶった
ちくしょう
おれは　ガラスは破るし
チョークは投げるし
ゴロツキでノケモノだけど
おれはいつも先生の話すの
を聞いているぜ
そりゃ
ちっともわかんないけど
おれは　まじめなんだ

それなのに
先生は　おれをぶった。

先生　先生　先生
劣等生だよ
ぶ厚い参考書も
買えないんだよ
おれが悪かったよ
あやまるよ
だから学校へ来ても
いいだろう
みんなと　話したいんだよ

教室の
ストーブのあたたかさを
食べたいんだよ。

この詩の途中にでてくる「ちくしょう」ということば、これをあなたはどのように読まれましたか。私は、「遊びにくるようなやつは家へ帰って寝てろ」「学校へなんかくるな」と「おれをぶった」「先生」に対する「ちくしょう」だとはじめ読んだのです。ところが、読み進むうちに、どうもそればかりではなさそうだぞという気がし始めたのです。何とかしていい生徒になりたいのに、どうすればいい生徒になれるのかわからない自分自身に対する「ちくしょう」でもあるようだぞという気がしはじめたのです。と

このような切り口で始まっている著書ですが、反抗期という子供たちの成長過程では、私自身もそうであったように、苦しくて出口の見えない不安や不満を、周囲の者に理解されない抑圧感が暴走とか・引きこもり・登校拒否・過食・拒食・虚飾・家出等々様々な行動として表れてくるものです。

この著書が出版されたのは昭和五一年ですから、前述の少年の詩は、現代の少年の反抗行動現象とは異なるでしょうが、根の部分は何時の時代も同じに思います。この様な少年期を親はどの様に受けとめればいいのかと、私も大変な苦悩した時期があります。

そんな時に出会った書物が「東井義雄先生」のご著書でした。

その中で学んだことは、親の価値観を一方的にお仕着せるのではなく、子供のレベルで一緒に考えてみる、父親は父親らしくその役割を示すこと。母親は上手下手は別として、どんなに子供が遅く帰っても手作りの食事を食卓に並べて、帰りを「待ってたよ」の形を表して親の心を伝える母の役割を忘れないこと、子供の無邪気な遊びや過ちはきつく叱らず、社会のルールに反する行為に罪の意識の希薄な時には、きつく反省を促すことの大切さを学びました。

山主　合掌

◆道心・趣味の会◆

短歌

●遠き山近き山にも春は来て
　木々はうっすら桃色をなす

●おとうとの逝きたるのちも藤棚に
　白き花房また新たなり

東区　矢野 淑子

●幾山河遠くこえ来てわれは今
　夢と現を行きつ戻り川

安佐南区　九十六翁　夢楽

俳句

●土筆摘む　膝に伝わる　地の温み

●貴妃桜　また逢へたねと　幹叩く

東区　河野 貞女

●咲き初めを　見落とすまいと　揚げ雲雀

●本啼きの　鶯ともに　墓参り

東区　岡村 竹畔

●こぶし咲く　社員研修　坐禅堂

東区　青笹　俊枝

●勤行に　和して長閑や　ホウホケキョ

禅峰

◆行事報告◆（二月～三月）

●二月二十八日　青山俊董尼老師の講演会、多数の聴講者があった。

●三月十五日　春彼岸法要及び護持会総会・当山廿二世大法正身大和尚五十回忌法要が厳修され、ご家族ずれ等多数の参拝者で賑わった。

●三月二十四日に「もやいの碑」建立地鎮祭が執り行われました。禅昌寺総代さん始め、建設関係者が出席されました。

◆行事案内◆（四月～七月）

■毎週定例行事

●暁天坐禅会　月曜日～金曜日
　毎朝五時十分より五十分まで

●水曜坐禅会　午後七時より坐禅・茶話会　終了八時半

●婦人坐禅会　毎週金曜日午後一時より坐禅・茶話会　終了三時（第一金曜日のみ坐禅の後、写経、茶話会）

■毎月定例行事

●上田宗箇流茶道稽古日
　毎月一回　第三金曜日を予定
　午後二時から
※お抹茶と和菓子を気軽に楽しむつもりでご参加ください。

●御詠歌の会
　第二金曜日午前十時より自主練習
　第四金曜日午前九時より講師を招いて練習　昼まで
※五月は第二金曜日に講師による練習です。
◎茶道の稽古及び御詠歌の稽古は講師の都合で変更する場合もあります。初めて参加される方は、電話にてご確認ください。

●日曜坐禅会
　第一日曜日　午前九時より坐禅・茶話会　終了十時半

■恒例行事

●登山の会　四月十九日（土）
　行き先　極楽寺山（廿日市市）
　集合場所時間　ＪＲ廿日市駅午前九時半集合（申込みは電話にて）
※お友達をお誘いの上ご参加下さい。雨天中止といたします。

●お盆前諸堂掃除　七月二十七日（日）
　午前十時より　お子さん、お孫さんご一緒にご奉仕ください。昼食に「そーめん」を用意しております。

日帰り旅行の会

「芸北の新緑と潮原温泉をご満喫下さい」

●期日　五月二十三日（金）

●行き先　潮原温泉（廿日市市吉和）

●集合場所時間　午前九時・広島駅新幹線口を起点に参加者の最寄りのバス停等に数カ所集合場所を設けます。帰着は午後四時を予定。
（参加する方には追って集合場所時間を連絡します。）

●参加費　五千円（バス代・飲食代・入浴代を含む）

●申込み期限　四月末日・定員五十名になりしだい締切。

※現地では温泉の他・森林浴・カラオケボックス・マッサージ等お楽しみ頂けます。また、近隣のウッドワン美術館では、今話題のゴッホの「農婦」を展示しております。美術館観覧ご希望の方は参加申込みの際、"美術館希望"とお申し込み下さい。（入館料は実費）

予告

四国霊場巡りを一番札所～八十八番札所の終わるまで一泊二日の予定で何回かに分けて参拝したいと考えております。早速十一月十五日（土曜日）～十六日（日曜日）を予定しております。
◎旅行の参加申込みは電話にてお願いします。〇八二二二九一〇六一八

原稿募集

皆様の随筆、旅行記、体験談、趣味の短歌俳句など何でも結構です。お寄せ下さい。次号原稿締切は六月末日までにお願いします。